

6月22日（日）マルコの福音書7章14～19節

「外から入って、人を汚すことのできるものは何也没有ありません。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。」（15節）

14節でイエス様は「みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。」とのことばをもって再び教え始められます。そしてそのことばどおり、すべての人が聞いて悟ることをイエス様が願われた大切なことがそこには含まれています。

イエス様は「外から入って、人を汚すことのできるものは何也没有ありません。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。」（15節）と言われました。外から入るとは、これまでの議論から考えますと、手を洗わないで食事をすることを指しているのだろうと思われませんが、そのような外から人の内側に入るものではなく、イエス様は、人の中から出て来るものを問題にされたのです。たとえについて尋ねる弟子たちにイエス様は「あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか」などと言われてしまっただけでは、私だったら何も尋ねられないと思ってしまいそうですが、冒頭でも書きましたように、大切なこととして弟子たちには悟ってほしいとの気持ちもあったのではないかと思います。そのように悟ることが鈍い弟子たちではありましたが、それでもイエス様は弟子たちに対しても忍耐深く教えられます。

18, 19節「外から人に入ってくるどんなものも（食べ物）人を汚すことはできません。それは、人の心には入らず、腹に入り排泄されます。」と言われて、イエス様は、すべての食物をきよいとされました。そもそも、なぜ旧約聖書のレビ記11章のようにきよい動物ときよくない動物というような食物に関する分類規定があるのかということですが、それは神の聖さを教えると同時に、聖い神との交わりの妨げになっている罪や汚れということの人々に教えようとしたからです。食物規定に限らず、旧約聖書においては神の聖さと人の罪や汚れが対照的に語られていますが、イエス様がすべての食物をきよいとされたということは、もはやそれらの食物規定や身体における汚れなどが意味をなさなくなったことを意味しています。それは、イエス様の十字架における罪の完全な贖いにより、信じる者はすべて大胆に、恐れなく神に近づくことができるようにされているからです。本来、聖なる神に近づくことのできるはずのなかった私たちが、イエス様の贖いを通して近づくことができるようにされていることを感謝すると同時に、聖い主なる神への畏怖の思いは決して忘れてはなりません。

6月23日（月）マルコの福音書7章20～23節

「これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」（23節）

「外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。」（18節）と言われ、「すべての食物をきよいとされた」（19節）イエス様は、逆に「人から出て来るもの、それが人を汚すのです」と言われ、聖なる神と人との交わりを妨げている汚れは、人の内側、すなわち人から出て来るものにあると言われたのです。それらは、悪い考えから始まって、淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさなど13の例があげられています。まさに、神の戒めを捨てるなら、人の心は簡単に汚れに満ちることになります。そして、このような心で神を礼拝し、神に祈りをささげたとしても、心は神から遠く離れているので、それはむなしいと言われるのです。そして、実際に人の内側から、人の心の中から出て来て人を汚す事例として、イエス様は9～13節のコルバンをあげています。コルバンを考えれば、そこには悪い考え、貪欲、欺き、高慢、愚かさなどの心の中にある悪が、一気に吹き出しているようだといわんばかりです。人の内側にあるもの、人の心の中にあるものが、必ず私たちの行いや言葉になって外に現れ、それが時には争いのもとになったりします。

しかし、私たちは自分の内側の心のことを言われれば絶望するしかありませんし、いくら善行に努めたり、行いや生活、態度を改めようとしても、自分の内側が変わらなければそれも空しいということになります。そのような中で、イエス様の救いをいただくことで内に住まわれる聖霊様を通してのみ、私たちの心（内側）が変えられ、さらに私たち自身が変わられる道が神様によって与えられている恵みに心から感謝しましょう。

6月24日（火）マルコの福音書7章24～30節

「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」（28節）

イエス様は、弟子たちにきよさに関するたとえを教えられた後、そこを出てツロの地方へ行かれました。「だれにも知られたくないと思っておられたが」とありますので、ユダヤ人たちから離れて、少し休みたいと思われたのが理由だったのかもしれませんが。しかし、ペテロも使徒の働き10章28節で、「ご存じのとおり、ユダヤ人には、外国人と交わったり、外国人を訪問したりすることは許されていません。」と述べていますように、普通であればユダヤ人は異邦人の町ツロには行かないものですが、イエス様は当時のユダヤ人の常識をすべて覆され、ツロの地方へ行かれました。しかし、ツロの地方においても隠れることはできませんでした。実際に、3章8節を見ますと、ツロとシドンのあたりからもイエス様のみもとへ来たということは、異邦人の地域においてもイエス様の名が知れ渡っていたということです。

汚れた霊につかれた幼い娘を持つある女が、すぐにイエス様のことを聞き、やって来て、その足もとにひれ伏し、自分の娘から悪霊を追い出してくださるようにイエス様に願いました。（25、26節）「彼女はギリシャ人で、シリア・フェニキアの生まれであったが」というのは、この女が完全な異邦人であることを示しています。また願ったというのは、継続的に願い続けたとの意味があり、執拗にイエス様に請い願ったということなのでしょう。するとイエス様は「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」（27節）と言われました。子どもたちとはイスラエルの民を、小犬は異邦人を、パンは御国の福音とそれにとまなうイエス様のみわざをそれぞれ指しています。つまり御国の福音は、イエス様を通して、まずユダヤ人に宣べ伝えられ、ユダヤ人の中でみわざがなされなければならず、今はその時だというわけです。優先順位としてのユダヤ人の次が異邦人というのは、神のみこころであり、それを無視して異邦人の中で癒しのわざを行うことは今はできないと言われたのです。それでもこの女はあきらめることなく、28節で「主よ。食卓の下の小犬でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」と言いました。自分は、確かに神の契約の外にある異邦人であって、イエス様の目から見れば、小犬のような存在であると謙遜に認めました。しかし、そうであっても主のあわれみによって、自分もパン屑のような恵みのおこぼれにでもあずかりたいとの思いがこの女の言葉の中にあふれています。そして汚れた霊につかれた幼い娘を思う母親としての愛は、決してあきらめることなくイエスに願う姿に現れています。その女の姿がイエス様をして「そこまで言うのなら家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」と言わせ、まずユダヤ人の間でなされるべきみわざを異邦人であるこの女になさったのです。

私たちも、主の目から見れば、食卓の下にいる小犬のような存在であって、まさに主のあわれみにすぎない存在です。しかし主に熱心に祈ることはできます。しかしそれは何を願っているのか、心の動機が問われますが、主の御手を動かすような動機からのあきらめない祈りを主が必ず聞いてくださり、みわざをなしてご自身の栄光を現してくださいませ。

6月25日（水）マルコの福音書7章31～37

「この方のなされたことは、みなすばらしい。耳の聞こえない人たちを聞こえるようにし、口のきけない人たちを話せるようにされた。」（37節）

デカポリスの地方をイエス様はもう一度訪れました。最初は5章1節から、汚れた霊につかれた人から、その霊を追い出されました。しかし人々は、汚れた霊を追い出されたみわざを喜ぶどころかイエス様に、「この地方から離れてくださるようにと願った」（5：17）のです。しかし、汚れた霊を追い出していただいた人は、イエスのみわざを忠実に証ししました。そのこともあってイエス様は再びデカポリスの地方へわざわざ行かれたのかもしれませんが。と申しますのは、聖書地図などで確認していただければ分りますが、ツロの地方を出て、シドンを通り、ガリラヤ湖に行くというのはかなり遠回りだからです。

32節で「人々は、耳が聞こえず口のきけない人を連れて来て、彼の上に手を置いてくださいと懇願しました。もしかすると汚れた霊をイエスに追い出していただいた人の証しの成果かもしれません。それとともに、私が深く教えられたのは、6章55、56節でも書きましたが、病の人たちのためにイエスのもとに行き、懇願する人々の姿です。それだけ当時の人同士のつながりが強かったのかもしれませんが、私たちも救いを必要としている人々のために祈りをもって救いを懇願する者たちでありたいと思わされます。33節でイエス様は、この人の病める部分に御手を置かれました。イエス様は、この人の痛みに共感し、聞けない耳と舌にいつくしみの御手をもって触れられたのです。イエス様は、常に私たちを深くあわれみ、いつくしみの御手をもって触れてくださる方です。そして、彼は癒されましたが、イエス様は「このことをだれにも言ってはならない」と人々に命じられました。それは37節のような人々の反応を恐れたからです。ここをイエス様に対する人々の称賛と解釈する人もありますが、むしろ苦難のメシヤではなく、自分たちを敵の手から救ってくださるメシヤとして期待し、あがめているように思います。私たちも、人生をかけて従うべきお方は、自らを十字架につけた救い主イエスキリストであり、私たちに対しても、自分の十字架を負ってわたしについて来なさいと求められる方なのです。

6月26日(木) マルコの福音書8章1～10節

「するとイエスはお尋ねになった。『パンはいくつありますか。』弟子たちは、『七つあります。』と答えた。」(5節)

6章にも男だけで五千人の人々への給食の記事が出てまいります。ある人は、この奇跡はその給食の記事だと考える人もいますが、全く別の奇跡と考える方がふさわしいと思われまふ。「そのころ」という話しを転換させるような言葉が1章の始めに出てまいります、恐らく7章31～37節の物語の流れの中で、四千人の給食もなされたのだらうと思われまふ。

6章の五千人の給食の記事では、弟子たちのほうから「ここは人里離れたところで、もう遅い時刻になりました。皆を解散させてください。そうすれば、周りの里や村に行って、自分たちで食べる物を買うことができるでしょう。」(35, 36節)と言いましたが、8章ではイエス様のほうから弟子たちに、「かわいそうに、この群衆はすでに三日間わたしとともにいて、食べる物を持っていないのです。空腹のまま家に返らせたなら、途中で動けなくなります。遠くから来ている人たちもいます。」(2, 3節)と言われ、人々に対する空腹に対してもあわれみの心を示されました。しかし、6章と同じように8章でも、弟子たちは「こんなへんぴな所で、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができまふ。」(4節)と言いました。もちろん、自分たちにはこの空腹な人たちをどうすることもできないとの思いもあつたとは思いますが、それ以上に人々の空腹に無関心であり、イエス様と同じように空腹の人たちを見て「かわいそうに」とは思えなかつたということです。まずイエス様は私たちが空腹で苦しむことがないように、あわれんで必要な食物を与えてくださっています。生活の糧を得るための仕事や仕事をするのに必要な体力をも主が与えてくださっていることも主の恵みであり、あわれみであることを心から感謝しまふ。また、今も多くの国において飢餓で苦しむ多くの方々がおられます。また格差社会と言われる中で日本においても食べるにも事欠く人たちが多くおられます。主が、そのような方々のことをもあわれんでくださっていることを信じて、イエス様と同じあわれみの心をもってできる限りの支援の働きをさせていただきたいと思われまふ。

イエス様は「パンはどれくらいありますか。」(5節)と言われまふが、「どれくらい足りまふせんか。」とは言われなかつたのです。私たちは、これだけの必要が満たされれば、何とかかなりそうだと考えて神様に祈ります。しかし、そこに「私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行くことのできる方」(エペソ人への手紙3章20節)と信じる信仰はあるでせうか。イエス様は七つのパンと少しの小魚で四千人の人々を満腹にし、余りのパン切れを集めると、七つのかごになるほどのみわざを今もなすことのできるお方なのです。

6月27日（金）マルコの福音書8章11～13節

「この時代はなぜ、しるしを求めるのか。まことに、あなたがたに言います。今の時代には、どんなしるしも与えられません。」（12節）

イエスがダルマスタ地方にまいりますと、パリサイ人たちがやって来て、イエス様と議論を始めました。安息日に手の萎えた人をいやしたり、手を洗わないで食事をして、言い伝えをないがしろにしたり、自分たちが汚れていると考えていた人たちと食事をしたり、そして自分たちの罪を指摘されたことに我慢ならなかったのでしょうか。そして、ここでは「天からのしるし」を求め、イエス様を試みました。つまりイエス様が地上でなされた奇跡以上のさらなる証拠を求めたのです。それを示すことで、神からの権威によってイエス様がすべてのことをなしているということを明らかにするようというわけです。

それに対してイエス様は、「今の時代には、しるしは絶対に与えられません。」と言われました。なぜならイエス様ご自身が完全なしるしであり、イエス様を信じることでそれがその人に対する信仰とみなされるからです。イエス様は、神であるご自分の権威をもって人々を教え、みわぎをなしておられ、イエス様のなされたことは旧約の時代における神の約束の完全な成就ですから、それ以上の権威を求める必要はないのです。しかし、パリサイ人たちはイエス様が悪霊を追い出すみわぎを見ても、「悪霊どものかしらによって追い出しているのだ。（3：22）というくらいですから、実際に彼らにとってイエス様がなされたみわぎは何の意味もなかったのでしょうかし、さらなるしるしを見せても彼らが信じることはなかったでしょう。私たちもなかなか謙遜になれず、さらなるしるしを求めて、不遜にも主を試みる場合があります。そのような時こそ悔い改め、謙遜にイエス様とみこころを求め、イエス様に従う信仰を持たせていただきましょう。

12節に「イエスは心の中で深く嘆息して」とあります。ここにはイエス様の深い嘆きが込められていると思うのですが、恐らくイエス様はパリサイ人たちの不信仰を嘆かれたのでしょうか。それとともに「イエスをためそうとしたのである。」（11節）とありますが、イエス様の影響力がこれ以上回りに及ばないようにするために、イエス様の権威を確認しようとしたのではないかと思います。ここにもパリサイ人の心の中にある罪の深い闇の部分が見え隠れし、それもイエス様に深い嘆きと悲しみを与えたのです。私たちも不信仰によってイエス様を嘆かせることがないように、イエス様が私たちを見て深く嘆息することがないように、謙遜になって神のみこころに従う信仰をあたえられたいと願わされます。

6月28日(土) マルコの福音書8章14～21節

「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。まだ分らないのですか。悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。」

パン種は天の御国に例えられている場合などには肯定的な意味で用いられますが、今日のよ
うに、イエス様が「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種に十分気をつけなさい。」と言われる
ような場合には否定的な意味で用いられています。いずれの意味にいたしましても、パン種と
は目に見えない浸透性のある影響力を現しています。そして、パリサイ人のパン種とは、彼ら
の偽善に現れています。またヘロデのパン種とは、妻のヘロディアにそそのかされて、ヨハネ
の首をはねるところに見られる、立場や面子にこだわる権力の誇示のことを指しています。イ
エス様はご自分の弟子たちがそのような世の中に影響を及ぼしているパン種に影響されること
を警戒したのかもしれませんが。またパン種というのは、非常に小さなものですが、パンを焼い
た時にそれによってパンが大きくなりふくらみます。それと同じように、パリサイ人やヘロデの自
己中心的で、高慢な態度は彼らのうちでパン種のように大きくなり、イエス様に対して敵対的
で、不信仰な態度となって現れるようになっていきました。私たちのうちにもそのようなパン
種はないでしょうか。イエス様は今日も私たちの内に「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」
を見つけられて、十分気をつけなさいと警告を与えておられないでしょうか。もしそのような
ものがあるのであれば、悔い改めて神様に取り除いていただきましょう。

弟子たちはイエス様の言われたパン種が、自分たちがパンを持って来るのを忘れて、パンが
ないことを言われていると勘違いして議論し始めました。特に「くれぐれも気をつけなさい」
と言われたものですから、彼らはイエス様に叱られてしまったのだでしょう。そのよう
に議論している弟子たちに、「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。
まだ分らないのですか。悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。目があっても見え
ないのですか。耳があっても聞かないのですか。あなたがたは覚えていないのですか。」と言わ
れ、もう一度五千人の給食と四千人の給食の二回の出来事を通してイエス様ご自身がそのよう
なみわざをなすことのできるお方であることを弟子たちに思い出させながら、いくらみわざを
見ても、イエス様が誰なのかを悟ろうとしないことについて弟子たちを叱責しておられるので
す。イエス様は、私たちにもみことばを通して語りかけ、また日々の生活の中でさまざまなみ
わざや導きを通して私たちにご自身がどのようなお方かを知らせ、さらなる信仰へと導こうと
しておられるのですが、私たちの心が堅く閉じているがゆえに悟らないということはないでし
ょうか。私たちの霊の耳や目が閉じているがゆえに、見るべきものが見えていない、聞くべき
ものが聞けないということはないでしょうか。イエス様に目と耳を開いていただきましょう。
そして霊の目をもってイエス様とのみわざを見せていただき、聞くべき御声を聞かせていた
だきたいと願わされます。